

「養老の滝」説話の展開

『玉櫛笥』巻一の第一話「養老の滝」を中心に

金 永 晃

一、はじめに

岐阜県養老町養老公園内にある養老の滝は、貧しい孝子が酒を好む老父（または老母）を養うために薪を採りに山に入り、酒の滝（または泉）を発見して、老父（または老母）に与えるという説話の題材になった滝である。養老の滝説話は『続日本紀』にその原型となる記録が見え、それ以後、説話集・御伽草子・仮名草子・浮世草子・寺社縁起物・仏経注釈書などの様々な書物に採られている。

本稿で考察する『玉櫛笥』（七巻三十一話）は元禄八年（一六九五）に林義端によって刊行された浮世草子怪異小説集である。作者義端については、元禄四年（一六九一）に浅井了意が歿するとその翌年には遺稿集『狗張子』の序文を書いて刊行し、同年十月には中国明代の文言伝奇小説集『剪灯余话』の和刻本を刊行したことがよく知られている。義端はそれに留まらず、『剪灯余话』と『狗張子』を

模倣して『玉櫛笥』を刊行し（跋文による）、翌年にはその続編『玉篇子』を刊行したが、いずれも近世怪異小説の系譜において、談義本と初期読本へ繋がるものとして高く評価されている^{注1}。

近世怪異小説史を俯瞰する時、義端の作品は非常に重要な意味を持っているにもかかわらず、その創作方法についてはいまだ明らかになっておらず、検討すべき課題が多い。例えば、『玉櫛笥』の巻頭を飾る巻一の第一話「養老の滝」の場合、従来の研究では謡曲「養老」、十訓抄²及び『本朝故事因縁集』に収録されている養老の滝説話との関連性が指摘されているに過ぎないのである。

そこで本稿では、筆者がこれまで収集した養老の滝説話を紹介したうえで、どのような先行作品から着想を得、それをいかなる方法で利用したかを考察することによって、義端の創作方法の一端を探りたいと思う。また、義端の養老の滝説話はいかなる性格を有する作品として生まれ変わり、『玉櫛笥』の中でどのような位置を占め

ているかについても考察したい。

二、「養老の滝」の内容紹介及び先行研究

では、『玉櫛笥』『養老の滝』の内容について簡単に説明しておく。話が長いので、筆者が注目したいところを中心にあらすじを記すと次の通りである。なお、『養老の滝』の本文は江本裕・湯沢賢之助編『玉くしげ』（『古典文庫』第五一九冊所収、白橋印刷所、一九九〇）に拠った。

天正年中、美濃国本巢の郡に草野の何某が住んでいた。草野は京都で奉公していたが、老母が病氣であるため、故郷に帰って看病をした。草野は近郷に出て人に雇われ、その賃で魚肉を買って母に与えた。三年後、母が死んで草野が泣き悲しんでいると、その門前を通りかかった貴人が草野に教えることがあると言つて、草野のある滝壺に連れて行つた。貴人は酒や肴をもてなした後、草野の「孝行の徳」が天まで通じたので、この滝の下に連れて来たのだと言ひ、更に「この滝は『楊柳観音の霊場』で、『神仙鎮護の名滝』であり、自分は世の常の人ではないと言つた。そして、滝の由来について語り始めた。

昔、第四十四代元正天皇の時、本巢の郡に一人の孝子がいた。

酒を好む老母のために毎日薪を採つて酒に換え、老母に与えた。ある年の冬、大雪が降つたので薪が得られず、酒も買えなかつたため、嘆きつつ「滝の流れ」を眺めていたところ酒のにおいがしたので、孝子は喜んで酒を汲んで母に与えた。この酒は、「長生不死の仙薬」であつたので、母はまもなく若くなり、白髪も黒くなつた。ついには、汲んでも尽きない「酒の泉」のおかげで、一家は富み栄えた。国の人々はこれを瑞祥であるとし、朝廷に奏聞したところ、霊龜二年に勅使が下され、この滝の水を養老の滝と名付け、孝子は当国の国司に任命された。

貴人は、あの時の孝子が自分であり、孝行の徳によつて、長く養老の滝の下に住みながら当国守護の神になつたと言つた。そして、草野の孝行が自分の昔の孝行に近いゆえにこのように招待したと言つた。その時、山を巡察していた奉行人たちが、酒宴舞楽の音が聞こえるのを山賊たちであると思い、討ち取ろうと鉄砲を打ちかけ近寄つたが、そこには草野一人が茫然と座つていただけであつた。奉行人たちがその子細を尋ねると、草野はその次第を語つた。その後、草野は滝のもとで貴人に再び会い、「仙術成就し飛行自在の身」となつたという。

右に記した『玉櫛笥』『養老の滝』のあらすじを見ると、まず、草野の何某、そしてある貴人の二つの孝子譚から構成されているこ

とが理解される。草野の何某の孝子譚は、養老の滝の所在地が美濃国本巢の郡であること、草野は奉公のために上京していたこと、

酒が好きな老母を養っていたこと、この滝は「楊柳観音の霊場」

で、神仙鎮護の名滝」として描かれていることの四点が要点である。

貴人の孝子譚は、元正天皇の時に、本巢で、酒を好む老母を

養っていたこと、そして、冬の時、大雪が降ったので薪を得られ

ない事情が描かれ、嘆く孝子の様子、酒のおいがする滝の流

れを発見すること、酒を飲んで母は若返り、白髪も黒くなるなど

の霊験が現れたこと、一家は富み栄えたこと、そして、勅使が下

されたのは霊亀二年であること、最後の では、草野は神仙になっ

たということが描かれており、それによって養老の滝は仙界化した

地として記されている。

この「養老の滝」の典拠について初めて指摘されたのは太刀川清

氏である。氏は「林義端とその怪異小説」(『長野県短期大学紀要』

第二十六号、一九七二)で、『古今著聞集』、『本朝故事因縁集』、謡

曲「養老」との関連性について次のように指摘された。

『古今著聞集』八の、美濃国の賤夫孝養に依りて養老酒を得る事」

によりながら、孝子の親を老母としたところ、またこの流れを

滝にかえ、老母の白髪たちまち黒くなるのは『本朝故事因縁集』

によるものであり、孝子の出を美濃の本巢の郡としたのは謡曲

「養老」によるなど多方面から得た知識をもとに「養老の滝伝説」の孝子譚を再現し 後略。

次に、中村隆嗣氏は『玉櫛笥』考 執筆と素材 (『愛媛国文研究』第二十七号、一九七七)で『玉櫛笥』の出典をほぼ明らかにしているが、「養老の滝」については「今日でも人口に膾炙したはなしであり、又、既に類話が指摘されている」としたうえで、

『十訓抄』、『古今著聞集』、謡曲「養老」など、いわゆる「養老の滝伝説」と称すべき、古来著名な養老の滝の孝子譚を題材にしたと考えられる。はなしの内容としては、老母に孝を施した後、孝子草野某は国司たる貴人の力で「仙術成就し飛行自在の身」となると、孝子譚と関係なく、半ば強引に怪異を持ち出したため、主題の孝行ばなしが半減してしまっている。

と、太刀川氏の指摘を受けて関連する説話として『十訓抄』、『古今著聞集』、謡曲「養老」を挙げた後、その文学性については低く評価している。

さらに江本裕氏は前掲書の解説において、義端が参照した可能性が最も高い作品について次のように述べている。

巻頭の「養老の滝」は諸書に出るので、『本朝故事因縁集』（以下『故事因縁』と略称する）巻一「美濃養老滝」を典拠と断ずるにはややためらわれる処もあるが（因みに記せば『続日本紀』では元正天皇自身が美濃国の美泉で体験、『十訓抄』と『古今著聞集』では老父へ孝養の息子の、『故事因縁』・『玉櫛笥』では老母へ孝養の息子の体験となっている）、「天正年中」の出来事とする点の一致で、『故事因縁』が『玉櫛笥』に最も近いと言えよう。

氏は、先行作品と比較した時、孝養の相手が老父ではなく老母であること、時代背景を天正年中とすることが共通しているため、『本朝故事因縁集』が『玉櫛笥』「養老の滝」の成立に最も大きな影響を与えたのではないかとしている。このような氏の指摘は正鵠を得たものである。しかし筆者は『本朝故事因縁集』との関連性についてはより具体的にテキストの比較が行われる必要があると考えており、更に『十訓抄』との関連性については以下考察するように、養老の滝説話の全体的な系譜の中での考察が必要であると考えている。

三、養老の滝説話の系譜と『玉櫛笥』の位置

養老の滝説話を記した最も古い文献は『続日本紀』養老元年の「養老改元の条」であるが、その一部を引用すると次の通りである。なお、『続日本紀』の本文は青木和夫・笹山晴生・稲岡耕二・白藤礼幸校注『続日本紀』（『新日本古典文学大系』第十二巻、岩波書店、一九九八）に拠った。

十七日（すめらみこと）癸丑、天皇、軒に臨みて、詔して曰はく、「朕今年九月を以て、美濃国不破行宮に到る。留連すること数日なり。因て当耆郡多度山の美泉を覽て、自ら手面を盥ひしに、皮膚滑らかなるが如し。亦、痛き処を洗ひしに、除き愈えずといふこと無し。朕が躬に在りては、甚だその験有りき。また、就きて飲み浴る者、或は白髪黒に反り、或は類髪更に生ひ、或は聞き目明らかなるが如し。自余の痼疾、咸く皆平愈せり。昔聞かく「後漢の光武の時に、醴泉出たり。これを飲みし者は、痼疾皆愈えたり」ときく。符瑞書に曰はく、「醴泉は美泉なり。以て老を養ふべし。蓋し水の精なり」といふ。寔に惟みるに、美泉は即ち大瑞に合へり。朕、庸虚なりと雖も、何ぞ天の呪に違はむ。天下に大赦して、靈龜三年を改めて、養老元年とすべし」とのたまふ。天下の老人年八十已上に、位一階を授く。

後略

元正天皇は当耆郡で湧出した美泉で手や顔を洗ったところ皮膚が滑らかになり、痛いところを洗ったところ全部治ったので、美泉の湧出は天からの贈物に違いないと考え、大赦を行い、老人には官職を与えたという。さらに傍線部のように、『符瑞書』の「以て老を養ふ」に因んで、年号を靈龜三年から養老に改めたという。

この記録では、湧出したのは酒ではなく美泉であり、孝子の話も

見えないが、美泉によって白髪が黒くなり、病が治るなどの靈驗が現れる点、美泉について瑞祥の印である点、年号を靈龜から養老に改元する点など、養老の淹説話の源流となる話として認めることができる。

この『続日本紀』の記事から始まり、養老の淹説話は様々な文献で採用され、展開され、定型性を帯びるようになるが、筆者がこれまで収集した養老の淹説話を年代順に並べてみると次の通りである。

【表1】 養老の淹説話の系譜

番号	成立・刊行時期	作品名
1	延暦十六年（七九七）	『続日本紀』養老元年の「養老改元の条」
2	建長四年（一二五二）	『十訓抄』中・巻六の第十八話
3	建長六年（一二五四）	『古今著聞集』巻八の第三二話「美濃国の賤夫孝養に依りて養老酒を得る事」
4	鎌倉末期	『寝覚記』第四話「をんを可知事」
5	室町初期	謡曲「養老」
6	室町中期	『碧山日録』長祿四年（一四六〇）三月四日の条
7	永正九年（一五一一）	『法華経鷲林拾葉鈔』巻十二の第八話「五百品第八」
8	室町中期	『法華経直談鈔』第九「授字無字人記品」
9	室町末期	御伽草子『養老の縁起絵巻』（穂久邇文庫所蔵）
10	慶長（一六二二）以前	『養老寺縁起』

11	寛文（一六六一―一六七二）	御伽草子『養老の縁起絵巻』（青山短期大学所蔵）
12	寛文五年（一六六五）	『大倭二十四孝』第十一話「壬生金寿事」
13	延宝九年（一六八一）	『養老縁起』
14	貞享二年（一六八五）	『本朝孝子伝』巻二「養老孝子」
15	貞享四年（一六八七）	『仮名本朝孝子伝』巻二「養老孝子」
16	元禄二年（一六八九）	『本朝故事因縁集』巻一の第二話「美濃養老滝」
17	元禄八年（一六九五）	『玉櫛笥』巻一の第一話「養老の滝」
18	元禄十年（一六九七）	『本朝二十四孝』巻上の第十話「養老孝子」
19	宝永三年（一七〇六）	『本朝語園』巻一の第四話「養老之滝」
20	正徳十四年（一七一四）	『絵本故事談』巻一の第十六話「養老滝」
21	享保二年（一七一七）	『扶桑怪談弁述鈔』巻六の第一一七話「美濃国養老滝」
22	寛延二年（一七四九）	『養老寺来由縁起略』
23	文化十三年（一八一六）頃	『美濃雜事記』所収『養老寺縁起』
24	天保十五年（一八四四）	『養老滝縁起』

『続日本紀』の記事における美泉の湧出を酒の湧出に改変し、孝子譚が付け加えられたのが『十訓抄』中・巻六の第十八話に収録されている養老の滝説話である。この『十訓抄』の説話をはじめ、の印を付けた話は『十訓抄』と本文と言っても過言ではないほど細部に至る内容までほぼ一致しているか、或いは多少の違いは見られるものの『十訓抄』をもとにしたと断定してよいものである。^{注3}そして、このような『十訓抄』系統の養老の滝説話は江戸時代におい

て盛んに刊行され多く流布^{注4}し、現在でも『日本伝奇伝説大事典』（角川書店、一九八六）や『日本説話伝説大事典』（勉誠出版、二〇〇〇）、『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八三）などの説明において、養老の滝説話は『十訓抄』を基準に説明されている。したがって、『十訓抄』の記述は養老の滝説話の代表的なものとして現在に至るまで最も広く知られており、先行研究においても一番入手しやすく有名なものとして『十訓抄』との比較が先に行われた

と思われる。

では、次に『十訓抄』の養老の淹説話の全文を引用する。なお、本文は浅見和彦校注・訳『十訓抄』（『新編日本古典文学全集』第
五十一巻、小学館、一九九七）に拠った。

昔、元正天皇の御時、美濃の国に、貧しく賤しき男ありけるが、老いたる父を持ちたり。この男、山の本草を取りて、その値を得て、父を養ひけり。この父、朝夕、あながちに酒を愛しほしがる。これによりて、男、なりびさこいふものを腰につけて酒を沽る家に行きて、つねにこれを乞ひて、父を養ふ。

ある時、山に入りて、薪を取らむとするに、苔深き石にすべりて、うつぶしにまろびたりけるに、酒の香しければ、思はずにあやしくて、そのあたりを見るに、石の中より水流れ出づることあり。その色、酒に似たり。汲みてなむるに、めでたき酒なり。うれしくおぼえて、そのち、日々にこれを汲みて、あくまで父を養ふ。

時に帝、このことを聞こしめして、靈龜三年九月に、そのところへ行幸ありて、御覧じけり。これすなはち、至孝のゆゑに、天神、地祇あはれみて、その徳をあらはすと、感ぜさせ給ひてのちに美濃守になされにけり。

その酒の出づる所をば養老の淹とぞ申す。かつは、これによりて、同十一月に年号を「養老」と改められける。

これを、先に紹介した『玉櫛笥』「養老の淹」と比較し、その違いを番号を振ったところを中心に表でまとめると次の通りである。

【表2】「養老の淹」と『十訓抄』との比較

番号及び内容	『玉櫛笥』「養老の淹」	『十訓抄』
養老の淹の所在地	美濃国本巢	美濃の国
全体的な構成	草野の何某と貴人の二人の孝子譚	「貧しく賤しき男」一人の孝子譚
養う対象	老母	老父
見、養老の淹を発する過程	淹が流れるのを眺めていたところ、酒の香りがしたため発見する	苔が生えた石に滑り倒れた後、酒の香に気付く（淹に関する記述はない）
勅使の派遣或いは天皇の御幸と時期	靈龜二年に勅使を下す（帝は訪問しない）	靈龜三年に帝が直接淹の元へ行幸する

右にまとめた【表2】を見ると、養老の淹の所在地について『十訓抄』では「美濃の国」とあるのみで、「本巢」についての言及がない。を見ると、全体的な話の構成として、「養老の淹」は草野の何某と貴人の二人の孝子譚が記されているのに対して、『十訓抄』は「貧しく賤しき男」一人の孝子譚のみで構成されている。で養う対象においても大きな違いが見られ、「養老の淹」では老母であ

るのに対して、『十訓抄』のほうでは老父である。そして、養老の滝を発見する過程の場合、『十訓抄』のほうでは苔が生えた石に滑り倒れた後、酒の香に気付く。ここで孝子はあくまでも水が流れるのを発見したのみであって、滝を発見したのではない。最後に勅使の派遣或いは天皇の御幸とその時期であるが、これは非常に重要な問題で、具体的なことは後述するが、これが一致するのは養老の滝が記された諸資料のうち『本朝故事因縁集』しかない。

これらの違いは作品を解釈するうえで非常に重要な要素であり、結局、『玉櫛笥』の「養老の滝」は『十訓抄』系統ではなく、別の系統の養老の滝説話との比較が試みられる必要があるといえよう。

四、もう一つの養老の滝説話

【表1】で提示した養老の滝説話の系譜を見ると、確実な成立時期は未詳であるが、一応慶長（一六二二）以前の成立と推定される『養老寺縁起』を源流としたもう一つの養老の滝説話群が存在することに気付く（【表1】で を附したもの）。

『養老寺縁起』の梗概は次の通りである。なお、『養老寺縁起』の本文は天野文雄『《養老》の典拠と成立の背景』『養老寺縁起』と明徳四年の義満の養老の滝見物をめぐって（『演劇学論叢』第四号、二〇〇一）に翻刻されているものに拠った。

昔、源丞内という貧しい孝子がいた。酒が好きな老母を養っていたが、ある時、公命によって在京することになり、その間は妻が孝子に代わって老母に孝行を尽した。冬になり、雪が積もつて、薪を採るための道も絶えたと、妻は自分の黒髪を抜いて酒に替えて母に与えた。ある夜、夢に一人の老人が現れ、山の奥に仙湯があるので母に与えるよう教えた。その後、妻が薪を取るために深い山に入ると滝を発見した。そこで沐浴をして、休んでから帰る時、岩の下から清水が流れるのを発見した。それを汲んで老母に与えると、老母は「これほどおいしい酒は飲んだことがない」と言った。その清水を飲んだため、二人は綺麗な女房に若返った。源丞内が帰郷してみると、二人は見紛えるほど若返っていた。三人は泉のお陰で長生きし、「仙家に及」んだが、これは孝行の験が現れたからである。それからその所は養老と名付けられた。源丞内の孝行の話は有名になり、雄略天皇はこのことを聞いて、勅使を下して確認させ、若水として備えた。

その後、時間は移り変わり、源丞内の子孫がいた。彼も親孝行で有名であったが、ある夜、夢に七十歳に見える老翁が現れ、大木の上に宝があると教えた。教えの通り、大木の上を確認すると、そこには鷲の巢があり、十二個の卵があった。それを家に持ち帰って見ると、金銀の宝石になったので、その場所に寺を建立し、天皇に奏聞した。元正天皇はめでたいことであるとし、勅使を下して、そ

の寺を養老寺と名付け、年号を養老と改元した。本巢と養老とは、距離は隔たっているが、ここを本巢と言うのは、鷲が養老に飛び来たり、また本の巢へ帰ったという奇瑞があったからである。この滝に詣でて水を浴びる者は、諸病が治って若返り、富貴の家になるなど、様々な利益が現れたという。

この『養老寺縁起』以外にも【表1】でを附した資料は『養老寺縁起』をほぼ丸取りしたものである。そこで、『養老寺縁起』と『玉櫛笥』『養老の滝』との関係について検討してみると、まず、酒が好きな老母を養つ点、冬になって、薪を採れない状況になった点、天皇が直接行幸するのではなく、勅使が下されるという共通点があり、これらの要素は『十訓抄』には見られないものである。しかし、これは『養老寺縁起』だけでなく、『法華経直談鈔』や『本朝故事因縁集』とも共通しており、で富貴の家になる点は『古今著聞集』『絵本故事談』『本朝故事因縁集』とも共通している。

したがって、『養老寺縁起』だけが『玉櫛笥』『養老の滝』と共通している部分を指摘するのが最も重要な作業であるといえよう。まず、を見てみると、養老の滝の所在地を本巢にしていること、そしてその理由について記されているところについて言及したい。先に引用した『続日本紀』の記録では、美泉の湧出の場所を美濃国当耆郡にしているが、ここは明治三十年の郡域変更によって、現在養

老郡になっている。養老の滝の所在地に関して言えば、『続日本紀』の記事の方が史実としては正しいと言えるが、それでは義端はどのような経緯によって、養老の滝の所在地を本巢に設定したのであるうか。そこには二つの理由が複合的に絡み合っている。

まず、養老の滝の所在地を本巢にしていることについて、『養老寺縁起』では次のように記されている。

此所ヲ鷲ト云、郡ヲ本巢ト云モ、右之鷲ノ奇瑞故ナリ。本巢郡ト養老ト遥隔ルトイヘドモ、彼鷲、此所ヘ飛来テ、又本巢ヘ立カヘル。其鷲ノ飛行超ノ跡ヲ本巢ノ郡ト名付シ故、此所、則本巢郡ト定也。

実際、養老の滝は本巢から約三十キロ程度離れた所にあり、『養老寺縁起』でも本巢について「本巢郡ト養老ト遥隔」たっていることは認めている。それにもかかわらず、白山の権現である鷲が飛び来て、本の巢に飛び帰ったことがあるため、滝の所在地を「本巢」と呼ぶようになったとしている。では、鷲の伝説を絡ませてまで、あえて滝の所在地を本巢にしたのはなぜだろうか。

白山は富士山・立山と共に日本三大霊山の一つとして有名であり、本巢は白山の一部である。『養老寺縁起』の目的は、養老の滝が本巢から遙か遠く離れているとはいえず、白山権現の使者である鷲

が「此所へ飛来テ、又本巢へ立力へ」ったことがあったため、養老の滝と養老寺を白山の一部の靈驗な場所として位置付けることになったと思われる。そうすることによって、 というように、源丞内一家が清水を飲んで「齡久保テ、仙家ニ及シト也」ということが起きてても何の不思議ではない場所になったのであり、「大慈大悲之觀世音ヲ安置シテ今ニ利生有」というふうに、養老の滝と養老寺が靈場として位置付けられる効果を挙げていたのである。つまり、寺社縁起としての『養老寺縁起』は白山の一部としてその靈場を強調するために、滝の所在地を本巢にしたのであろう。

『玉櫛笥』の「養老の滝」を見ると、後半部の構想において、仙界の地として養老の滝を位置付けている。そして、靈酒を飲むことによって不老不死の身になるのは孝行の徳によるものであるとしながら草野の孝行を称えている。特に、草野が「仙術成就し飛行自在の身」となることについて、中村氏の前掲論文を再び引用すると、「孝子譚と関係なく、半ば強引に怪異を持ち出したため、主題の孝行はなしが半減してしまっている」と指摘しているが、実は、この部分の記述は養老の滝を靈驗の地、或いは仙界として位置付けている『養老寺縁起』の内容を前提にしていたからであり、そうすることによって貴人が言う「こゝはもとより楊柳觀音の靈場にして神仙鎮護の名瀧なり」という言葉が説得力を持つことになるのである。これによって、山回りの奉行たちが経験する奇異な話と、草野が「仙術成就し

飛行自在の身」になるという話が充分に起こり得る場所になったのである。

また、注⁵ に挙げた天野文雄氏の論考によると、「養老の滝の所在地は現在は養老郡であるが、これは明治三十年の郡域変更以後のことで、それ以前は多耆郡（多芸郡）であった」とし、『養老寺縁起』が滝の所在地を本巢にした、その根拠について、「じつは養老寺や養老の滝のある地域は、少なくとも近世の初期から後期ころまでは本巢郡に属していた」としている。このようにみえてくると、義端の生存時には養老の滝の所在地は本巢であったため、『玉櫛笥』での場所設定を『養老寺縁起』に従って本巢にするのは自然な成り行きであったのであろう。

『養老寺縁起』との共通性について更に記せば、『玉櫛笥』のほうでは草野何某が「生長の後京都にのぼり西園寺殿に奉公し居たりける」とあるが、これは で源丞内が在京して母の元を離れる部分の構想と一致する。また、 で、話の全体的な構造が『玉櫛笥』では草野何某と貴人の二つの孝子譚で構成されているが、『養老寺縁起』も源丞内とその子孫の二つの孝子譚で構成されているのが共通している。そして、『玉櫛笥』で「終に汲とも尽ぬ酒の泉をたもちて一家富栄えぬ」というのは『養老寺縁起』で金銀の宝を「トレ共、更ニツキズ 中略 富貴ノ家ト可成也」という表現に拠るものである。

一方、『養老寺縁起』は版本がなく、写本でしか伝わらない。それでは義端はどのような方法で『養老寺縁起』を入手して読んだのであろうか。この点についての詳細は不明であるが、文会堂という書肆を経営しながら活版な出版活動をした義端の状況を考えてみると、彼はおそらく刊本だけでなく、広い分野にわたって写本までも読む機会に恵まれたため、『養老寺縁起』のような寺社縁起物までも入手して読むことが出来たのではないかと、一応は推測しておきたい。

五、『本朝故事因縁集』の利用方法

従来、『玉櫛笥』の「養老の滝」と関係が深いと考えられていた作者未詳の『本朝故事因縁集』は元禄二年（一六八九）の刊行で五卷一五六話からなり、主に唱道説法を説く因果譚および因縁譚を収めている。

それでは、『本朝故事因縁集』の本文を引用し、『玉櫛笥』「養老の滝」と比較しながら、先行研究で指摘されていなかったことを中心に言及してみよう。なお、本文は日野龍夫編『本朝故事因縁集』（京都大学蔵大惣本稀書集成）第八巻、臨川書店、一九九五）に拠った。

人皇四十四代 帝 元正天皇 靈龜二年丁巳、美濃国民

孝二行老母、毎日売薪買酒令飲。冬一日雪積無二酒銭。母渴酒。子歎望川。則其水有酒香。試飲之。則酒也。母喜飲之。須臾變老白髮。忽成黑色。終為酒泉一家富貴矣。而後国人奏聞。即被下勅使、令孝子任当国之国司。靈龜二年改養老之因縁是也。此滝有源無二末流矣。去天正年中白髮之老翁五人此滝洗髮。一月、其中一人變白為黑髮。殘四人空歸。此黑髮男、如上古孝母者也。後略

右の引用文から分かるように、『本朝故事因縁集』は非常に短い文章ではあるが、『玉櫛笥』「養老の滝」との共通点としていくつか注目すべきところがある。その最たるものは、の通り時代設定を靈龜二年にしていることである。『続日本紀』、『十訓抄』、『古今著聞集』、『碧山日録』、『寝覚記』などは時代設定がいずれも靈龜三年であり、謡曲『養老』、『鷲林拾葉鈔』、『法華経直談鈔』、御伽草子『養老の縁起』、『養老寺縁起』は明確に記されていない。時代設定を靈龜二年にしているのは『本朝故事因縁集』しかなく、これは義端が『本朝故事因縁集』を参照したという決定的な証拠であろう。

また、養う対象が老母である点、雪が降って薪を採れない状況になっている点、歎く孝子の様子が描かれている点、白髪が

黒髪に変わる点、一家が富貴になる点、天皇が直接行幸するのではなく、勅使が下される点など、これまで検討を行った他の作品より、『本朝故事因縁集』は多くの点において『玉櫛笥』との共通性が見られる。

更に、物語の中の具体的な表現においても、

『本朝故事因縁集』

子歎望川。則其水有酒香。試飲之則酒也。

『玉櫛笥』「養老の滝」

民うれへ歎きて此滝の流にのぞむに酒のかほりあり。あやし
みながら飲こゝろむるにまさしく酒にてぞありける。

『本朝故事因縁集』

須臾変老白髪忽成黒色。終為酒泉一家富貴矣。

『玉櫛笥』「養老の滝」

母須臾の間に老を变じわかやぎ白髪たちまち黒くなりける。
終に汲とも尽ぬ酒の泉をたちて一家富貴えぬ。

というふうに、『玉櫛笥』は漢文で書かれた『本朝故事因縁集』の文章を書き下したような表現の一致が随所に見られ、これも『本朝故事因縁集』から影響を受けていることの可能性を更に高めるもの

である。

更に注目したいのは、において、天正年中（一五七三）一五九二に白髪の老翁五人がこの滝で髪を洗ったところ、その中の一人が白髪が黒くなるという靈驗が現れるが、その理由は、「上古」のように母に孝養を尽している人であったためであるとされている点である。この短い文章によって、一応、形としては『玉櫛笥』と『養老寺縁起』のように、二つの孝子譚が併記されるものとなっているが、実は、ここには見逃してはならない極めて重要な意味が込められている。それは時代設定を『玉櫛笥』と同じく「天正年中」にしていることである。

つまり、『本朝故事因縁集』においては、元正天皇の靈龜二年の孝子譚を踏まえたうえで、天正年中の孝子譚が後日談として簡略に述べられているのを、義端は時代を逆転して、天正年中の草野某の孝子譚を先に語った後、国司とおぼしき貴人が元正天皇朝の靈龜二年のことを回想して語る形式として作り直したのである。

六、 おわりに

最後に、義端はいかなる構想を持って『玉櫛笥』の「養老の滝」を作り上げたかについて検討しておこう。以下の表は、これまで検討した養老の滝説話と「養老の滝」を比較し、その共通点をまとめ

たものである。

【表3】『玉櫛笥』「養老の滝」と先行作品との比較

玉櫛笥	十訓抄	養老寺縁起	謡曲「養老」	本朝故事因縁集
本巢所在地	美濃国	本巢	本巢	美濃国
霊龜二年	霊龜三年	・	・	霊龜二年
老母を養つ	老父	老母	両親	老母
孝子の在京	・	孝子の在京	・	・
冬	・	冬	・	冬
嘆く孝子	・	・	・	嘆く孝子
孝子が発見	孝子が発見	孝子の妻が発見	孝子が発見	孝子が発見
富貴になる	・	富貴になる	・	富貴になる
勅使が下される	帝が行幸する	勅使が下される	勅使が下される	勅使が下される
二つの孝子譚	一つの孝子譚	二つの孝子譚	一つの孝子譚	二つの孝子譚
滝の仙界化	・	滝の仙界化	滝の仙界化	・

右に記した【表3】を見ると、義端が参照したのは『養老寺縁起』と『本朝故事因縁集』、そして謡曲「養老」の三作品（謡曲「養老」とは注8で述べたように一部の表現の一致が認められる）にほぼ限定することが出来る。つまり、義端は「霊龜二年 天正年中」の順で展開されている『本朝故事因縁集』の全体的な構造を逆転して、「天正年中 霊龜二年」の順で展開させながら、全体的な肉付け

及び表現は『養老寺縁起』と謡曲「養老」に拠ったところが多いのである。

しかしながら、『玉櫛笥』「養老の滝」では、主人公の名前が草野である点、国司とおぼしき貴人が登場する点、山廻りの奉行が鉄砲を打ちかける点などほどの資料からも共通性が認められない。また、草野が仙術成就し飛行自在の神仙になる点は、了意の『浮世物語』の最終話「浮世房蛻たる事」で「仙術を行ひて、長生不死の法を得」て神仙になった浮世房のことを連想させるが、直接的な影響関係を指摘するにはややためらわれるところがある。

したがって「養老の滝」は先行する養老の滝説話に原拠を求めたものではあるが、その内容に関しては、義端の創作といつてよいものも多く組み入れられている。一方、注2の先行研究で筆者がすでに指摘した通り、義端は先行説話を利用する場合、出典となる説話二―三篇を解体して、それぞれの文章を丸取りしながら合成する形で成立した話が多く見られる。しかし、「養老の滝」に関しては、その創作方法は、『玉櫛笥』の他の作品のそれとは異なるところがあるようである。つまり、典拠の取り合わせという点においては他の話と変らないが、その再構成の方法において、他の話にはないような独創的な工夫が多く見られるのである。そして、このように先行作品を利用しながらも自分の創作を大きく加え、原話離れが著しく見られるからこそ、義端は『玉櫛笥』の巻頭を飾る巻一

の第一話として、自分にとつて最も独創的な「養老の滝」を位置付けたと考えることもできるのではなからうか。

【注】

注1 飯倉洋一氏は「怪異と寓言 浮世草子・談義本・初期読本」(『西鶴と浮世草子研究』Vol.2、笠間書院、二〇〇七)において、浮世草子に垣間見え、談義本や初期読本で顕著になる傾向として、知的議論・世相批判・歴史評論などの導入がある」としたうえで、「浮世草子から、談義本・初期読本へ繋がる文学史の一面として見逃せない要素」として寓言を提示しており、「漠然とではあるにしる、寓言的手法を自覚した作品」として浮世草子怪異物の『玉櫛笥』と『玉簪木』を挙げている。

注2 その後、筆者は参考文献 欄に挙げた論考において、次のような出典を新たに指摘したので、参考として記しておく。

『玉櫛笥』	出典
巻一の第二話「猿誦法花経」	『元亨釈書』巻九「雲浄法師」 『剪灯余話』「曉經猿記」
巻二の第二話「賢者知三世」	『万松院殿穴太記』
巻三の第一話「畜生塚」	『伽婢子』「金閣寺の幽霊に契る」 『剪灯余話』「江廟泥神記」 『將軍記』第十九「豊臣秀吉記」 『聚楽物語』巻之上
巻三の第四話「松永弾正墮地獄」	『伽婢子』「地獄を見て蘇」 『太平記』「結城入道墮地獄事」
巻四の第四話「雨林院」	『武者物語之抄』

注3 の『本朝語園』は題名の下に「続日本紀」と注記している。

しかし、老父を養う孝子譚である点、湧出したのは酒である点、帝が直接養老の滝に行幸する点があり、それに対して若返ったり病が治るなどの霊験が見られないことなどから、実際の出典は「十訓抄」であることは明らかである。

注4 国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによると、「十訓抄」には、元禄六年(一六九三)、享保六年(一七二一)、寛延四年(一七五二)、文化二年(一八〇五)、天保一四年(一八四三)の刊記を持つものがある。

注5 天野文雄氏は「養老」の典拠と成立の背景「養老寺縁起」と明徳四年の義満の養老の滝見物をめぐって「(『演劇学論叢』第四号、二〇〇一)において、『養老寺来由縁起略』には慶長年間に行われた徳永寿昌による再建記録があるのに対して、『養老寺縁起』にはそのような記録がないことから慶長年間以前に成立したのは間違いないと推定された。ここまでは筆者も同意するが、氏は更に「室町後期の『法華経鷲林拾葉鈔』や『法華経直談鈔』にみえる養老説話が、前述のように、勅使が下向する形であること、孝子に養われるのが老母であること、などが『養老寺縁起』の設定とかななることを勘案するならば、そうした諸点を『養老寺縁起』の投影とみなして、A系の『養老寺縁起』の成立を『法華経鷲林拾葉鈔』成立の永正(一五〇四)以前とすることも、あるいは許されるのではないかと思う」としたうえで、「世阿弥作の『養老』の典拠としての資格を有する資料ということになるのではないだろうか」と指摘している。しかし、傍線を引いた共通点については、これがなぜ『養老寺縁起』の投影とみなしうるかについての説明が不足している。逆に『養老寺縁起』が『法華経鷲林拾葉鈔』や『法華経直談鈔』から影響を受けた可能性も十分あり得るからである。

注6 例えば、『養老寺縁起』と青山短期大学所蔵本「養老の縁起絵巻」の冒頭部分を比較すると次の通りである(『養老の縁起絵巻』の本文は、伊井春樹「養老の縁起絵巻」の成立」(『古筆

学のあゆみ』第五巻、一九九五）に翻刻されているものに拠った。また、文脈を考慮し、私に句読点と濁点、そして、「」を入れた。

養老寺縁起	養老の縁起絵巻
抑此養老ノ滝ト申事、昔此所ニ源丞内ト申者也（有の誤りか）シ也。彼者六十ニ余ル母一人持。酒ヲ好ミシカドモ、其身貧ニシテ、朝夕ノ営僅也。雖然、親ニ孝行ナルコト世ニ勝レタリ。或時、所ノ役ニ随テ在京ノ事有ケリ。一人ノ母ヲ捨テ登ランコト悲ミテモ猶余リアリ。「跡ニ誰アリテ母ヲ養育シ孝行ノ中勤ラツクシ、朝暮、母ニ見エシヤ。」涙ヲ流シ、「母諸共ニ他國ヘモ隠レナン、ト嘆キケレバ、	そも、このやつらつたきと申こと、むかしこのところにげんぜうないと申すものありしなり。かの者六十にあまの母一人もつ。さけをこのみしかども、その身ひんにして、あさゆふのいとなみかすかなり。しかりといへども、おやにかう。なること世にすぐれたるある時、ところのやくにしがひて、さいきやうのことありけり。一人のはをすてゝのぼらんことかなしみてもなをあまりあり。「あとに又だれありてか母をやういくし、かう。のちうきんや」と、なみだをながし、「母もろともにたこくへもかくれなん」となげきければ、

右に引用した兩作品の冒頭部分を比較してみると、漢字・平仮名の表記の別を除けば、細部に至る表現までほぼ一致し、『養老の縁起絵巻』が『養老寺縁起』をもとにして書かれたのは間違いないことが分かる。しかし、最後まで兩作品の本文を比較してみると、『養老の縁起絵巻』は孝子譚が終わった後、養老という地名の起源について言及することで終わっているのに対して、『養老寺縁起』での該当部分はまだ全体の半分にすぎない。『養老寺縁起』の後半部は雄略天皇が勅使を送って滝を確認させた話と源丞内の子孫の話が続くのである。寺社縁起物としての『養老寺縁起』の場合、前半の孝子譚を前提にしたうえで、後半部分の養老の滝及び養老寺の由来、場所を本巢にすることによって霊験の地であることを強調することに主眼が置かれている。それに対して、

『養老の縁起絵巻』の場合、『養老寺縁起』の後半部を削除するだけで成立した、極めて単純な作業によって出来上がったかのように見られるかもしれないが、実はこのような作業によって作品の主題が変わり、教訓的な性格を帯びる絵巻として生まれ変わったのである。

注7 養老の滝の所在地について、『続日本紀』では「美濃国当耆郡」、「十訓抄」では「美濃国」、「法華経直談抄」では「美濃国両芸庄」、「鷲林拾葉抄」では「美濃国多芸郡」としている。一方、謡曲「養老」では「本巢」にしており、これは『養老寺縁起』との大きな共通点であるが（『日本古典文学大系』の頭注では「本巢郡」と言うのは誤伝」としている）、これは謡曲「養老」が『養老寺縁起』と非常に近い関係にあることを示唆している。しかし、謡曲「養老」のほうでは、酒が湧出するのではなく、醴泉が湧出する話になっている点、孝子が養うのは老夫婦である点、養老の滝と名付けたのは自分たちである点など、多くのところで『玉櫛笥』、『養老寺縁起』、『十訓抄』とは異なる。一応、『表3』から分かるように、養老の滝を仙界化している作品は全てその所在地を本巢にしているという共通点があるが、謡曲「養老」と『養老寺縁起』との関連性については今後の課題としたい。

注8 ここで「楊柳観音」を登場させ、白山権現と絡ませて養老の滝を仙界化させている点は、謡曲「養老」で、われはこの山山神の宮居、または楊柳観音菩薩」というところから着想を得たものである。

〈参考文献〉

- 青木和夫・笹山晴生・稲岡耕二・白藤礼幸校注『続日本紀』（『新日本古典文学大系』第十二巻、岩波書店、一九九八）
 浅見和彦校注・訳『十訓抄』（『新編日本古典文学全集』第五十一巻、小学館、一九九七）
 天野文雄『養老』の典拠と成立の背景『養老寺縁起』と明徳四年

- の義満の養老の滝見物をめぐって」(『演劇学論叢』第四号、二〇〇一)
- 飯倉洋一「怪異と寓言 浮世草子・談義本・初期読本」(『西鶴と浮世草子研究』Vol.2、笠間書院、二〇〇七)
- 伊井春樹「養老の縁起絵巻」の成立」(『古筆学のあゆみ』第五巻所収、一九九五)
- 江本裕・湯沢賢之助編『玉くしげ』(『古典文庫』第五一九冊、白橋印刷所、一九九〇)
- 表章・横道万里雄校注『謡曲集(上)』(『日本古典文学大系』第四十巻、岩波書店、一九六六)
- 勝又基編『本朝孝子伝 本文集成』(明星大学平成二十一年度特別研究費「説話文学の中世と近世」本朝孝子伝を中心として」研究成果報告書、明星大学、二〇一〇)
- 金永昊「玉櫛笥」の「畜生塚」考察 林義端の構想と怪異性を中心に」(『韓国語』(『日本研究』第四十四号、韓国外国語大学日本研究所、二〇一〇)
- 「林義端の『玉櫛笥』考察 巻一の第二話「猿誦法花経」を中心に」(『韓国語』(『日本研究』第三十一号、檀国大学日本研究所、二〇一〇)
- 「『玉櫛笥』に現れた地獄譚考察 『伽婢子』及び『太平記』との関連性を中心に」(『韓国語』(『日語日文学研究』第七十六号、韓国日語日文学会、二〇一一)
- 「『養老の縁起絵巻』の成立と性格 『養老寺縁起』との関連性を中心に」(『韓国語』(『日本言語文化』第十八号、韓国日本言語文化学会、二〇一一)
- 「『玉櫛笥』に現れた寓言考察 先行歴史物の利用を中心に」(『韓国語』(『日語日文学研究』第八十七号、韓国日語日文学会、二〇一二)
- 島田勇雄・永積安明校注『古今著聞集』(『日本古典文学大系』第八十四巻、岩波書店、一九六六)
- 太刀川清「林義端とその怪異小説」(『長野県短期大学紀要』第

- 二十六号、一九七二)
- 中野幸一編『本朝孝子伝』(『奈良絵本絵巻集』第一巻、早稲田大学出版部、一九八八)
- 中村隆嗣「『玉櫛笥』考 執筆と素材」(『愛媛国文研究』第二十七号、一九七七)
- 日野龍夫編『本朝故事因縁集』(『京都大学蔵大惣本稀書集成』第八巻、臨川書店、一九九五)
- 柳牧也「書肆・林義端考」(『国文学研究』第二十五号、一九六〇)